



「茶話やかサロン」を開催している民生委員児童委員協議会の三浦美和子さんは、「育児などで困ったことを相談できるので、心強く思っています」と話してくれた。10年後、20年後も、次の世代が笑顔で暮らせる「まち」でありつづけるために、専門性や若い力をまちづくりに生かす仕組みが求められている。

-3-

スキルを生かした新しいカタチのボランティア

ひろしまNPOセンターの取り組みから

今、自分の持っている知識やスキルを生かしてボランティア活動ができる「プロボノ」と呼ばれる新しいカタチのボランティアが広がりをみせている。

「プロボノワーカー」として登録したボランティア希望者が、5、7人程度のチームを編成し、平日の夜や土日などを使って、約半年間の支援プロジェクトに参加する。

「プロボノワーカー」は、自分のスキルやノウハウを普段とは違う環境で発揮することができ、それが社会課題の解決に結びついています。普段は出会わないような方と接したり、知らない世界に触れることで、『社会』の見え方が変わり、自分の仕事や人生にも生かせるといったメリットもあるんです」とひろしまNPOセンターの松村さん。

「『こうなったらいいな』と考えるような社会をつくるためには、個人よりも組織のほうが活動しやすいですね。NPOには、社会を変えていくことができる可能性を感じています。ひろしまNPOセンター

はNPOを支援するNPOです。社会資源であるスキルを持った人とNPOをつなぐコーディネーターとして、プロボノ活動も行っていきます」と話す。

NPOとして活動するためには、組織基盤の強化が欠かせないという。「目に見えにくい部分ですが、しっかりとした組織でないと活動が続けることが難しくなるんです」。

現在はプロボノの約8割のプロジェクトがウェブページの作成だが、業務フロー設計や事業計画立案の支援にも力を入れていきたいと、意気込みを語る。

プロボノとは、ラテン語で「公共善のために」を意味するpro bono publicoの略。各分野の専門家や職業上持っている知識・スキルや経験を生かして社会貢献するボランティア活動全般を指す。



ウェブページ作成のチームを組む、依頼者であるNPO団体にヒアリング、中間提案をするプロボノワーカー。



特定非営利活動法人
ひろしまNPOセンター
プロジェクトマネージャー
まつむら わたる
松村 渉さん

市民の力や思いをつないでカタチに



自治振興部協働推進課長・市民活動センター所長
なかがわ・みほ
中川 美穂

昨年4月、「廿日市市協働によるまちづくり基本条例」を施行しました。この条例には、「つなごりを育みながら、『はつかいちが好き!』と言えるまちを実現したい」という思いが込められています。2020年の廿日市市の高齢者の割合は32.1%と推測されています。これは全国を10年先取りした状況だそうです。こうした人口構成の変化や地域課題の多様化に対応し、誰もが暮らしやすいまちであり続けるためには、まちづくりに多くの人が関わり、お互いにつながりながら力を発揮していくことが、これまで以上に大切になっています。

今回、4つの取り組みをご紹介しましたが、廿日市市には、地域活動やボランティア活動で培ってきた知恵とエネ

ルギー、企業や学校がもつ専門的な技術など、たくさんの資源があります。

わたしたちが仕事をしている市民活動センターは、こうした市民の力や思いをつなぎ、皆さんが連携しながら活動に取り組むことができるよう、協働によるまちづくりを進める拠点です。センターでは、日ごろの活動で培ったノウハウを持つ市民活動団体と市の職員が連携し、「ネットワーク」、「相談」、「人材育成・研修」、「情報収集・提供」、「活動拠点」の5つの機能を発揮して、皆さんの活動をバックアップします。

「まちづくりに関わってみたい」、「他の団体とつながって取り組みを広げたい」という皆さんに、ぜひ利用していただきたいと思います。

-4-

企業のチカラで地域を活性化

カルビー株式会社の取り組みから

阪神大震災でボランティアの力が確認されたように、東日本大震災ではこれに加え、企業の社会貢献が注目された。廿日市市でも、地域への寄付や自社製品の提供などといった一般的な活動に加え、地域の活性化を願う取り組みが芽生え始めている。

カルビー株式会社は社員の行動規範に「地域社会への貢献」を掲げ、地域と連携した活動に取り組んでいる。平成21年から、社内公募で集まった社長直轄の組織「社会貢献委員会」を設置。中国地方では、オレンジリボン活動や子育て支援を中心に、宮島の清掃、地域のお祭りやイベントへの参加などを通して地域と深く関わっている。

同社の社会貢献委員である筑本哲司さんは、「この活動が始まって3年目ですが、企業も地域に暮らす一員として地域を盛り上げる必要があります」と話す。

10月には、中央市民センターで行われたヤングフェスティバルに初めて参加し、クイズラリーで会場を盛り上げた。参加者からも好

評で、「若い社員も参加し、地域の人と身近に接することで、地域の人達がカルビーのことをどのように考えているのかが分かり、とてもよい経験をさせていただきました」と筑本さん。4月に主催者と知り合い、参加して欲しいと言われたのがきっかけとのこと。

「カルビーは広島発祥の会社です。地域に密着して、一緒に汗を流すことが必要だと考えています」と筑本さんは強く語る。

また小学校などを訪問し、総合学習の時間を利用して食育活動にも力を入れている。「カルビーがこの地にあるということとを子どもたちに誇りに思ってもらえるような活動をこれからも続けていきたいです」。



おやつを通じて、次世代を担う子どもたちの健やかな暮らしをサポートしたいと、平成15年から「身近なおやつを考える」をテーマに、小学校への出張授業を実施している。

カルビー株式会社 西日本事業本部 市場開発課 社会貢献委員 ちくもと・てつじ 筑本 哲司さん



まちづくり交流会 in はつかいち vol.2

～いろいろな活動を知ろう～
を開催します

問合せ 協働推進課 協働推進係 ☎@3810

「自分の活動を知ってもらいたい人」、「これからの活動に向けてヒントがほしい人」、「ピンとくる「つなごり」を探している人」、「とりあえず、ワイワイ話したい人」など、なたでも参加できます。今回紹介した皆さんの活動発表や、活動されている皆さんが元気になるようなオンラインセミナーからのお話、交流タイムもあります。ぜひご参加ください。

2月7日(休) 18時30分〜
ところ 廿日市市民活動センター 第1研修室ほか
コーディネーター I-HOE(人と組織と地球のための国際研究所) 代表者 川北秀人さん

詳しくは、支所、市民センターの窓口においてあるチラシか、市ホームページをご覧ください。